



Title	「ともに考える」ための道具 : "Socratic Dialogue"の経験から
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 4, p. 14-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「ともに考える」ための道具

"Socratic Dialogue"の経験から

堀江剛

今年7月、哲学プラクティス国際学会に出席した。哲学を大学でのアカデミックな営みに限定せず、社会に向けて「開業 Practice」することによって広く私たちの生活場面に役立てようとする動きが「哲学プラクティス」である。そこでは、いわゆる「哲学カウンセリング」や「哲学コンサルティング」が行われている一方で、「集団による思考・判断」の作業を方法的に整備し、それを社会の中で活用することも試みられている。その方法の柱になっているのが "Socratic Dialogue"（以下SDと略記する）と呼ばれるものである。今回の学会では、本大会の前にこの SD のワークショップが行われ、臨床哲学のメンバー三人（本間、寺田、堀江）が参加した。

"Socratic Dialogue"とは？

SDは哲学者 L. Nelson (1882-1927) によって考案され、その後ドイツ、イギリス、オランダのグループが、これを集団での合意形成・意思決定のための一つの形式として発展させたものである。現在SDは、社会や組織の中で通用している思考習慣や価値判断などを、それらの個人間の違いや調整の仕方を含めて議論し反省するための方法として、学校、病院、企業などで活用さ

れている。また、特定の理論に頼らず哲学する（反省的にものごとを思考する）ことの良質な環境を提供するものとして、哲学の学生や哲学に関心を持ちそれを社会の現場に生かそうとする人々のために役立てられている。

具体的にSDを始めるに当たって、まず議論のためのテーマが一つ与えられている。テーマは参加者に関心のある適切なものが主催者によって決められている場合もあれば、前もって参加者と相談の上で決める時もある。一つのグループの人数は6～10人、そこにSDの進行役 facilitator が加わる。時間は一日から一週間まで様々だが、決められた時間内に議論を終えることが要求される。

SDが定める議論の手順は次のようなものである。まずテーマに即して、参加者一人一人が自分の具体的な経験に基づいた「事例 example」を出す。同時に、その事例に関連して自分が何を明らかにしたいのかを考え、それを一般的な「問い合わせ question」のかたちにする。次に、出された事例の中から、グループが議論の材料として共有すべきものを一つ選ぶ。選ばれた事例は、それを出した人によって詳細に報告される。他方、出された問い合わせを参考にしながら、選ばれた事例と関連してグループ

として明らかにしたい問い合わせ一つに絞る。そしてこの問い合わせに対して、参加者が答えを出し合い吟味し、グループとしての「答え」を仕上げる。

参加者は、本などによって得た理論や知識を用いず、自分の経験から明瞭・簡潔に発言するよう求められる。出された一つ一つの事例・問い合わせは、グループでの合意事項として、また着実に議論を進めていくための目印として、簡潔な文章のかたちで(選ばれた事例はさらに詳しく)板上に書き出される。さらに、グループが議論に行き詰った場合には、参加者や進行役の提案によって、議論の進行の仕方に関して議論する「メタ・ダイアローグ」が行われる。

ワークショップで行われたこと

ワークショップで与えられたテーマは「理解と誤解」、二つのグループ(進行役を除いてそれぞれ8人と9人)が三日間(約18時間)かけて議論を行った。私の参加したグループには、すでに十数年オランダやイギリスでSDを指導している哲学者の進行役とともに、様々な国(オランダ、ベルギー、ドイツ、カナダ、オーストラリア、日本)から多彩な職業(生命倫理が専門の哲学者、企業コンサルタント、教育関係の

企業経営者、学校教師、「ダイアローグ・コンサルタント」、臨床哲学の大学院生)の人々が集まった。いずれも、人との対話や集団でのコミュニケーションに関わり、それを仕事にしている人たちである。

参加者から出された「事例」は様々であった。人に道を尋ねその言葉は理解できたのに、実際にはその道筋が予想外に複雑で、目的の場所に辿りつけなかった経験。病気で死にゆく友人に励ましの言葉を投げたが、それが理解されたかどうか分からなかつた経験。自分の言ったジョークが相手に理解されなかつた経験。その他、生徒と教師との間の理解と誤解、仕事上の伝達ミスなどが事例として出た。そしてその中から「人に道を尋ね・・」の経験が、シンプルかたちで議論できるという理由で選ばれ、参加者の質疑とともにその事例の詳細が模造紙4-5枚にわたって書き出された。

これと並行して様々な「問い合わせ」が提示された。「理解とは何を意味するのか」「どのような状況のもとで理解は損なわれるのか」「理解はどれほど経験に依存するのか」「理解は何に基づいているのか」「ものの「言い方」は理解にどのような効果をもたらすのか」などなど、合計で約20もの問い合わせが立てられた。そこからグループとして選ばれた問い合わせは、次のようなものである。「様々な種類の理解があり、また情報・知識に程度の差があることを考慮した上で、理解とは何を意味するのか」。

こうした作業に二日を費やし、最後の一日でグループとしての「答え」を仕上げることが残された。そのためにはまず、選ばれた事例のポイント(それは、道を教えられた時の「言葉(情報)の理解」と、そこから目的場所まで行けると思った時の「理解したと思ったこと(誤解?)」との落差であった)をグループで確認し、それを手がかりにして個々の参加者から様々な「答

え」の試みがなされた。その数は13にのぼった。こうした試みを調整し、最終的にグループが合意に達した「答え」は次のようなものである。

1 理解とは、情報とともに一定の状況に対処するための何らかの手段を得ていることを意味する。

2 理解とは、問題になっている事柄(それが知ること・見ること・為すことのいずれであれ)を満足させる限りで、何かを捉えていることを意味する。

3 理解とは、情報を得ること以上の何かを意味する。そしてその「以上の何か」は時に不明瞭であり、誤解を生む可能性を持つ。

4 以上の三点は、しかし理解することの意味の全ての範囲をカバーしない。なぜなら理解は(後になって何かが分かったり分からなくなったりするように)不連続な変化を伴ったダイナミックな過程でもあるからである。

このような「答え」が一般的に満足のいくものかどうかは別にしても、私たちはグループとして一つの事例に基づきそれを考え抜いて、曲がりなりにも一つの成果を得た。この成果を得るために、グループは様々な寄り道をし、混乱し、再び気を取り直して議論を続けるというプロセスを踏んだのである。

議論するプロセスの大切さ

SDでは、内容に関して深く思考すること以上に、議論そのもののプロセスを体験することにこそ、大きな意味がある。言い換れば、より優れた結果をSDで出すことが問題なのではなく、むしろそのプロセスが問題なのである。参加者には、与えられたテーマに対して自分の考えをまとめ、表明すること以上に、他の参加者の経験や

考え方を十分理解すること、そしてグループでの合意のためにそれらの異なった考えを調整していく努力が、議論の個々の局面において求められる。これは非常に骨の折れる作業であるが、SDはその作業を参加者に遂行させる方法なのである。

そしてそれはSDの設ける手順やルールによって可能になっている。すでに述べた、人数・時間の制限、板上への書き出し、理論ではなく自分の経験から発言すること、「事例」や「問い合わせ」の共有、「メタ・ダイアローグ」などがそれである。また参加者は、議論の中で生じた疑問点を必ず表明するよう求められ、原則としてそれに関して全員が納得の行くまで議論を続行しなければならない。こうした一連のルールによって、議論は抽象的になったり大きな飛躍を含むことなく、極めてゆっくり着実に進行する。

一見すると、SDの要求する様々なルールは議論を型にはめ込み、自由な討論を制約するかのように思える。私たちも実際にSDに参加するまでは、そんな感想を持っていた。しかし事態は全く異なっていた。通常の討論では、それが「自由」である故に、討論の本来の営みを搅乱してしまうことがよくある。例えば、知識の豊富さや権威などによって相手の意見を押さえつけ



ロンドン・タワーの堀江さん

る、話題を突然変える、様々な観点が提出されて議論の焦点が定まらなくなる、具体的な経験に依拠しないことから話が抽象的になる等々。また人数が多くて参加者の発言する機会が偏ってしまう。しかしSDでは、こうした要因(それは必ずしも議論にとってマイナスになるばかりではないのだが)の多くが、ルールを通して回避される。

もちろん、こうしたルールによってすばらしい討論が常に展開されるわけではない。SDはある意味で、ルールによって制御された極めて人工的な議論の空間であると言えるし、それ故の限界もある。しかし少なくともそこで参加者は、与えられたテーマについて他の人とじっくり考えると同時に、本来の議論することの難しさとそのプロセスの大切さを学ぶことができると言える。

議論の土台を共有する作業

SDを実際に経験し、その個々のプロセスやルールの意味を細かく見ていけば、議論することに関する数多くの示唆が得られるであろう。今、その中で一つ特に興味深いと思われた点を書き留めておきたい。

たいていの討議では、その材料となる事例や資料は前もって与えられている。あるいは参加者によって、その人の経験や知識として(予定されたかたちで、もしくは突然)議論の中に持ち込まれる。この時、材料がみんなに十分理解され、議論に妥当するものとして承認されているかどうかは、差し当たって問われない(もちろん議論の中でこれが問題になることはありうる)。同様に、議論の中で何が明らかにされるべきかは、あらかじめ前提にされている場合もあれば、参加者が個人的に持っている課題や問題意識として、議論の中で他の参加

者に投げかける場合もある。しかしそうした「問い合わせ」が、いちいち全員で吟味されることはまずない。議論における材料や問い合わせは、ほとんどの場合議論の外から参加者に与えられるか、それとも参加者個人の問題に(つまり、これもまた議論の外に)委ねられるか、いずれかなのである。

ところがSDでは、こうした材料・問い合わせをまず参加者全員が出し合い、議論の上でその中の一つを選び取ることから始める。つまり議論の土台となる材料・問い合わせ自身を議論によって吟味し、参加者の間で共有する作業から始める。これによって少なくとも、経験や問題意識を異にする人々がそれぞれの立場から恣意的に議論を始めるという混乱が抑制される。また参加者は、議論の土台そのものを議論の外から強制的にあるいは偶然に「与えられた」ものとしてではなく、自分たちが議論によって「選んだ」ものとして引き受けことになる。SDは全体の半分あまりの時間を費やして、この議論の土台の共有という調整作業を丁寧に行うのである。

またこの作業は、参加者の議論に対する関わり方において、議論が「別様にもなりえた」という自覚を促す。選ばれた事例がもし別のものであったなら、議論は全く異なったものになっていたであろう。また、様々に異なる観点から別の仕方で「問う」ことが可能であったにもかかわらず、その中の一つをグループはグループとして選んだのである。そして議論の結果見つけ出された「答え」もまた、その限定された可能性の中から生み出されたものであり、それをグループとして引き受けなければならぬことが意識される。

議論の土台を共有するという作業を通じて、参加者は、自分たち自身が責任を持って議論を進め、その結果を認めなければならないことを自覚する。またこの作業に

よって、参加者は自分たちの進めている議論に対して一定の距離を取り、議論の在り方を冷静に評価できるようになる。こうした意味でSDは、集団での討論というものが複数の個人による単なる合意や妥協以上の共同作業であること、それが様々な可能性を取捨選択しながら進行する一個の共同的な思考プロセスであることを、その限界も含めて教えてくれるように思われる。

「ともに考える」ということ

三日間のワークショップが終わって、二つのグループが合同で語り合った。そこではSDの意義をめぐって肯定・否定含めて様々な意見が出された。その中で一人の参加者が、SDの意義を何も難しく考える必要はない、それは「ともに考えること thinking together」だ、と言ったのが印象に残っている。

単純な言葉ではあるが、それはSDの本質を言い当てていると思った。そして同時に、SDを体験した者として、そこには複雑な意味合いが含まれているように思えた。すなわちこうである。SDは「ともに考える」という、言葉にしてみれば単純な喩みでしかない。だがその喩みがどれほど困難で骨の折れる作業であり、それを実現するためにどれほどの方法的な工夫を要することか。こうした作業や方法的工夫を通じて初めて、私たちはより濃密なかたちで「ともに考える」ことができるのである。

SDは、どのようなメンバーとでも、どのようなテーマでも行うことができる。また、民主的な討議を実現するための一定のルールを持っている。しかしそれは、例えば討議倫理の思想のように、民主的な合意形成をめざす倫理的な理念を示すものではない。もちろんこうした理念と重なる部分はあるにしても、SDの本領はむしろ、実

際にそれを様々な領域の人々とともに実行することのうちにある。そこで体験される共同的な思考プロセスのうちにある。言い換えればSDは、領域の異なった人々、あるいは同じ領域の人々が「ともに考える」ための実践的な「道具」として本来の機能を発揮すると言える。だからこそ「哲学プラクティス」の有効な力になりえている。

また、領域の異なる者が集まって議論し、現場に深く関わる人々と「ともに考える」ことを課題とする臨床哲学にとって、SDは有効な道具の一つになると思われる。すでに10月、私たちは「他者理解」というテーマで短いSD（一日）を実験的に行つた。参加者の反応は概ね良好であったが、進行役の能力を含め、さらに経験と工夫が必要であることも実感した。私たちは、今後も臨床哲学にSDを活用する道を模索していくであろう。

（ほりえつよし・博士後期課程）

マクベスの上演された庭